

たぎ、大かた如此の働多し。上方筋の人のかたぎは華奢風流なれば、つよみは十が七八も奥のごとくにはなしといへり。

此以下筑前州片嶋武矩所著の武備和訓の内に有之。

一、葛西園右衛門の射藝に就て

葛西園右衛門は古今無雙の射人、大樹の御前に於て射場を三拾間に構へ、根矢を以て人形を射けるに、三十筋にて二十九筋を當たり。或射手曰。大矢數の權輿淺岡平兵衛長年十一筋より和佐大八に至て、尤絶倫なる者は葛西氏也と。

然れば園右衛門といふとも、三十間より遠くしては、鎧武者を射登す事成べからず。敵間三十間より只七八間六七間に及ぶべし。至まで、矢番早く射出すつもり凡征矢五十筋計成べし。又葛西・和佐等に少し劣りたるは十八九間より七八間までの間、漸二三十筋に過べからず。又それに劣りたる弱弓は、十三四間より七八間の間に、十五六筋を射出す事精誠成べし。然るに大矢數は通矢已に九千筋に及べり。是其用何如と云事をしらす。又古今の強弓、鎧武者を重て三騎も徹したりと云例もなし。北宋の將軍岳飛といふ者、

孫吳の書に通じ、百戦して一度も負けず、百斤の弓を持て能く左右に射て人を仆すと。本朝百斤の弓を射者不少して、未だ左右に射る人を不聞。能之せば又名達の人成べし。源爲朝の一箭に艦を射沈めたる如きは、古今第一の強弓にして、規と成すべき者にあらず。

一、家藝の道に誇るべからず

士たらん者は必過言を慎むべし。若藝者ならば我家藝の道には、猶更謙退して誇るべからず。先年宮本武藏二刀流の元が弟子芝任シヤニと云浪人來り、知行四百石にて仕官す。其國の執事何某武藝を好で、己が家禮の若黨數十人、彼が門弟として二刀を習はしむ。一日執事芝任に謂て曰。足下の劍術尤鍛鍊いふべからず。願くは其奥手とする所を見たと。芝任が曰。我藝に八人詰と云事候。恐くは尋常の者八人、八方より我を圍み候とも、容易切抜る術なりと云。執事聞之、究竟の壯士八人を出し、幸足下の門弟なり、是等を敵手にせられよと募る。劍客莞爾として、弱者ども木刀風を見せ候はゞ皆逃散候はんと云。壯士等大に怒て今迄は師弟なり。是よりは寇離たり。僅の技藝を以て大國に來り、吐

出す詞こそ有るべけれ、只撃殺せと仰り、髭を撫で腕をさすりて、争ひ進む。其中に清水何某とて其頃九州無雙の大

力あり。三年竹の六寸周ありて節短なるが、風に曝れて火色に成たるを根引にして、長四尺八寸に捻切、己が三尺六寸の鞘囊を用て竹刀とし、庭上に躍出る。之に續て七人の勇士、各木刀を提て後に隨ふ。芝任枇杷の木刀を八の字のごとくにくみ、中央に立り。清水、芝任が正面にむかへば、七人は周りて八陣の方位の如くに是を圍み、聲をかくるとひとしく八方一度に奮迅して打之。清水四尺の竹刀を、芋がらの如くあげ力を揮ひて打之。芝任は飛蝶の如くに躍り、二刀をむなしとせず。或は潜りて圍をぬけ、千變萬化に相闘ふ。清水竹刀を横斜に撃げ、芝任を堀際に追詰め延かけて打けるに、芝任が首の鉢を筋違に、左の肩骨を打碎き大地に打据えけり。劍客、大勇力士に打れ立所に息絶たり。執事興を覺しける處に、一時計ありて蘇生せり。其後四五日を経て逐電しぬ。一藝に名ある者は、用ひられずといふ事なしと、韓退之の云置ける。眞の上手名人は何程自ら拙しと謙るとも、人必ずつたなしとせず。遊藝等には興

に乗じて自讃すとも、武藝は言の端にも不可誇。此清水

氏は元來寺澤家の浪人なりけるが、後に黒田家の陪臣となれり。或時冑の名鍛冶妙珍と云者の家に至り、様々冑を請て見けるに、最上の重釜を出して見せけるが、清水曰。此冑の如きは我心に入らぬ、是は我拳を擧ても能挫くべしと云。鍛冶大に嘗て曰。御士の言は鐵石の如く成べし。其冑拳を以て碎き給はゞ、御望に任せ價を請ず、妙珍が秘製を用ひ冑を作りて進すべし。疾く冑を破給へと募る。元來清水は大兵ならず、面相容貌頗る平人に不異、絶世の強力とはおもひかけざるも理也。清水莞爾として冑を左の掌にのせ、右の手指を以て壓之に、鐵炮の疵より大に指の形に壓窪めり。其後釜を基盤にのせ、拳を擧て徐に打之けるに、挫けて荷葉の風に破たる如くになれり。後に細川家に至り、臂力を以五百石を領して仕官す。劍術・柔術其外武藝に達す。誠に奇世の力士也。愚謂。清水力に誇る意あり、冑を碎たるは血氣甚しきものなり。妙珍が嘗るにて冑を碎かねば、男の道立ぬ様になりゆきたるは前の過言故なり。游侠は武の道に非ず。武士は萬人に優る力ありとも、常に隠して人